

菊地清明氏インタビュー

1996年7月15日（月）

村田 まず、簡単に経歴を確認させていただきますと、75年から77年が経済協力局長でいらっしゃいますね。77年からシンガポール大使を2年未満、79年から82年まで外務審議官をお務めになって、それからメキシコ、カナダ、国連の各大使をお務めになって、88年にご退官ですね。70年代の前半には大平外相の秘書官もなさったんですか。

菊地 いや、62年7月18日から64年7月18日まできっかり2年間。池田内閣は、末広がりというので、18日に改造するんです。

村田 75年の経済協力局長の前は、どういうポジションにいらっしゃいましたでしょうか。

菊地 71年に経済協力局へ入るまではアメリカ大使館に2年いて、その前、66年から69年まではドイツのボンにいたんです。71年からずっと経済協力局。私は、経済協力局に一貫して7年以上いた記録ホルダー。参事官で帰ってきて、次長になって、局長になった。7年間いたんですよ。ですから、僕は、外務省の中で経協マンということになっているんだ。けれども、その前はずっと日米関係ですからね。

村田 それはかなり異例のことですか。

菊地 異例でしょう。同じ局に続けて7年いるなんというのは、全く異例中の異例だ。というのは、経済協力というものがちょうど上昇気流にあったときで、渡辺先生のヒアリングでもいったけれども、僕が局長になってから、1977年に初めて「経済協力白書」を外務省から出した。それまでは、あたかも通産省が経済協力の主管省であるかのごとく、「経済協力白書」は何と通産省が出していたんです。そのために、経済協力は日本の輸出振興の手段であるだろうという非難を招く結果になりかねなかった。現にそういう非難があったんです。それで、日本では外務省だけに経済協力局という「局」の名を冠している主管の部局がある、これは外務省が出すべきだということで、随分抵抗がありましたけれども、外務省から出したんです。

村田 71年7月のニクソン・ショックのころはワシントンにいらっしゃったわけですか。

菊地 もう日本に帰ってきていました。

村田 ワシントンにいらっしゃったころ、ワシントンの日本大使館では、例えば米中接近というようなことは全然予期していないことではのでしょうか。

菊地 ないでしょうね。ただ、我々外務省の中の伝説になっていて、皆さんもご承知だけでも、朝海駐米大使は、「自分の最大の心配は、ある朝突然国務省から電話がかかって

きて、アメリカはこれから中国と国交回復することになったから、どうぞよろしく。今までの協力ありがとうございました」といわれることはナイトメアだといっていたんですね。その話は知っているでしょう？この話は我々は直接朝海さんから聞かされているわけです。

私は、朝海さんがロンドン公使のときその下において、ワシントンの大使のときと、彼には2回任えているわけです。ですから、私は朝海さんの考え方は非常によく知っている方ですけれども、彼はしょっちゅうそういうことをいってしまして、我々若い者に浸透していましたから、外務省の者は驚かなかった方でしょうね。

村田 先生はワシントンの大使館ではどういうご担当でいらっしゃいましたか。

菊地 ワシントンは一貫して経済関係。本省では経済局の米国カナダ課長、その前、1951年、52年は経済局第三課でした。そのころは北米と南米一緒でしたから、第三課が米州課だったんです。

村田 71年7月にニクソン・ショックがあるわけですが……。

菊地 ニクソン・ショックというのは中国の方でしょう。

村田 中国の方です。「アメリカ派」という言葉は適当かどうかわかりませんが、あるいは在米大使館にいらしたような方はどうしてこんなことが予見できなかったのだという、省内での批判みたいなものはございませんでしたか。

菊地 ないですね。今いったように、我々はそういうふうに朝海大使の名言と称するものに馴致されていますからね。我々が外務省へ入って最初に教えられることは、怒ってはいけない、驚いてはいけない、ということですから、我々はいかなる突発事態があっても驚かない。

村田 外務省全体は割と平静に受けとめたということですか。

菊地 外務省の一部には、無邪気に信じている人に対して、「ざま見たことか」という思いを抱いた人すらいるかもしれない。外務省は極めてさめていますから、対米一辺倒とか、対ソ連一辺倒とか、対中一辺倒とか、はっきりいって、そういう人はむしろ軽蔑されるんです。

田中 1カ月後の経済の方のニクソン・ショックはどうですか。

菊地 これは驚きでしょうね。中国との関係で朝海さんが警告したように、金融関係で警告した人は大蔵省にもいませんでした。私はそのころずっと経済関係でしたけれども、大蔵省の中でそういうことをいった人は知らない。大蔵省というのは想像以上に対米べったりです。それは驚くべきものですよ。あれだけ痛めつけられてもアメリカにくっついてい

るといのが日本の本質的な体質です。

これは理由がある。僕は行天（豊雄）君なんかととことんまで議論したのですけれども、行天君は最後に「日本はアメリカの経済力にはかないません。このごろ、アメリカの経済はだめになったとか、斜陽だとかいう人がいるけれども、私はそうは思いません」という。それが大蔵省のいわゆる知米派のホンネですね。

田中 第1次のニクソン・ショックも、日本国内レベルで見ると大あわてになって、佐藤総理は大変苦しかっただろうと思いますけれども……。

菊地 佐藤さんが苦しかったのは中国の方でしょうね。

田中 経済の方は、大蔵省はなぜ東京市場をずっとあけっ放しにしていたのかという議論が今あるわけですが、その当時は、経済協力局に移されていて、横目で見ているという感じでいらっしやいましたか。

菊地 私は前に経済局の米国課の課長をやっていますから、大蔵省のアメリカ関係の連中と非常に親しくした。経済協力局でも相手は大蔵省ですから、その雰囲気は若干知っているつもりですが、やっぱり大変なショックで……。ただ、ショックの程度は違うけれども、大蔵省もこれが初めての経験じゃない。1963年の利子平衡税が第1次ショックです。これは池田内閣、大平外務大臣でしたが、日本がアメリカから金を借りる場合、借りた金に平衡税がつく。アメリカの金利と日本の金利を比較した場合、アメリカの金利が非常に低い。低いところから高いところへ貸すわけだから、もっと税金をかけてもいいということで税金をかけた。日本が一番の借り手だったので、これは大蔵省にとっては最大のショックだった。殊に池田首相が非常にびっくりしたわけです。

それで、当時の経済企画庁長官だった宮澤さんに「すぐ行って交渉しろ」といったら、宮澤さんがその前の晩に盲腸炎になって、（笑）急遽大平外務大臣におはちが回ってきた。ワンデーノーティスで、大平さんと僕と2人で出かけていったんです。そのときにケネディ大統領にも会ったし、ディロン財務長官、ラスク国務長官、デーヴィッド・ロックフェラーなどニューヨークの財界人に会いまして、まずは利子平衡税はやめてもらいたいというのが第1線。第2線は、もしやめられないなら、カナダに免除したように日本にも免除してくれ。第3線として、もしそれもできなければ、日本に免除枠を下さいと交渉した。免除枠というのは、例えば7000万ドルまでの借り入れには税金をかけない、それ以上になったら税金をかけるというもので、そういう交渉をして、結局、日本は1億ドルの特免をもらったんです。そのときは、僕が秘書官をやめて米国カナダ課長になったときで、大蔵

省の国際金融局（当時は為替局）と一緒に交渉しました。

それから、なぜ東京市場をあけておいたのかという質問ですが、そのころはさすがに出なかったんだ。あのとき柏木さんは大蔵省顧問ですね。国金局以外の主計局とかほかの局からは、「いつまであけておくんだ。いつまで損するんだ」といわれたらしいです。今度の「住専」じゃないけれども、大蔵省は危機に面したら結束しますから、そのころはそういう声は聞こえなかった。ただ、我々みたいに割とコンタクトのある者に対しては、何で為替市場をいつまでもあけておくんだ、まるで意地になっているんじゃないか、ということをしている人がいるということは聞いていました。

村田 話は戻るのですが、さっきの米中接近の話で、朝海大使のナイトメアみたいなことがいわれていて、そんなに驚きはしなかったというお話でしたけれども……。

菊地 驚きはしなかったと余りカテゴリーカルにはいいたくありませんけれども、外務省の連中は、普通の人よりは若干イミュノロジー、免疫性は持っていたと思いますね。

村田 ワシントンから東京にあててそういう可能性があるということを報告をするとか、そういうことはございませんでしたか。

菊地 僕はよく知りませんが、ないと思いますね。

これも若干エピソード的な話になるけれども、キッシンジャーはあのときパキスタンから入ったでしょう。そのときの駐パキスタン大使が、かの有名な曾野明大使です。曾野明大使といえば、外務省では、ソ連通、情報通の第一人者だったわけです。その彼がパキスタンにいて、しかも、自分の目の前をキッシンジャーが通ったということを本省に打電できなかった。これは彼が死ぬまで非常に悔やんだことです。

彼が外務省を退官したときあいさつ状が来たんですけれども、彼のあいさつ状だけは特別長い。プリントしてあって、その中に、自分はパキスタンにいてあれを見抜けなかったことは一生の不覚だった、しかし、これからは論壇に入っているいろいろやるつもりだと書いてありました。彼が時事解説者になる宣言ですよ。そういうことによってもわかるように、恐らく、外務省ではどこもわからなかったんじゃないかな。キッシンジャーの大変な陽動作戦でしたからね。

村田 外務省の中にも、アメリカあるいはニクソン政権に裏切られたというようなセンチメントはかなり強かったでしょうか。

菊地 裏切られたって、何で裏切られたの？

村田 頭越し接近ということで。

菊地 頭越し接近というのは、裏切るのとは違います。それは自由です。

村田 でも、そういうふうにお思いになった方も結構いらっしゃったんじゃないですか。

菊地 いたかもしれませんが、僕は思いませんでしたね。外交問題というのは余りエモーショナルに考えちゃいけないんだ。

村田 これもやや図式的に申しますと、日中の国交正常化を早くから進めようとするアジア局と北米局との間で、対中政策をめぐる対立みたいなものをお感じになったことはないですか。

菊地 ないですね。

村田 対中政策をめぐる、外務省の中があるグループに分かれてというようなことは余りご記憶にないですか。

菊地 ないです。橋本恕中国課長は、職責上、一生懸命日中関係を進めようといろいろ考えた。しかし、彼の最大の仕事は、対中関係ではなくて、国内の反中共派に対する説得です。彼は別に中国語を話すわけでもありませんから、彼の功績は国内説得です。彼はそれには最も適していたわけですね。

もし対立があるとすれば、現実を認めて、中国と早期に国交回復すべきであるということ、国連の代表権の問題については、余りフィクションを設けなくて、実体をあらわすような中国政府そのものが国連で代表権を持つべきであるということを主張する派と、それはそうかもしれないけれども、国際政治の現実から見て、そう理屈どおりにはいかないじゃないかという派と、そういう2つの派ぐらいでしょうね。外務省の者としてそれに反対する者はだれもいませんよ。

村田 特定の局同士の対立というようなことではないわけですね。

菊地 ないです。

田中 私はこの時代の経済協力について勉強したことないので、よくわからないのですが、経済協力局に7年いらっしゃったときの一番重要な政策は何でしたか。

菊地 日本はそのころ経済協力の金額で世界3番目ぐらいだった。アメリカ、フランス、その次ぐらいで、ドイツと並んでいたんですが、さっきいったように上昇気流にあって、

だんだん量をふやし、条件もよくしていこうということだった。ただ、大蔵省と折衝するのに、ただ援助額を伸ばさなくちゃいかぬというのではだめなので、1977年だと思いますが、僕が経済協力局長になって初めて経済協力の第1次中期計画案ができたんです。

これは、5年計画で経済協力額を伸ばすのが第1目標。第2目標は、経済協力の理念を打ち出すことですね。僕の経済協力局の末期には、量的に多くなっただけに国民の批判の目が厳しくなった。なぜ日本は対外経済協力をやるのか、日本の公共事業に金を使わないで、なぜ外国の公共事業を援助するのかということ、いろんな批判があって、75年ぐらいいから対外援助の理念が問題になった。国会からもいわれるし、日本国内のマスコミからもいろいろいわれるので、僕が初めて、外務省として経済協力の理念を出すべきじゃないかといひ出した。そのことは渡辺先生のヒアリングのときに非常に詳しくいいましたけれども、その2つですね。

五百旗頭 田中さんが74年に東南アジアを歴訪したときに、ああいうのは大きな衝撃だったんですか。

菊地 衝撃ではあったけれども、大きな衝撃じゃなかったですね。あのころ、我々の情報では、タイでもインドネシアでも学生の騒動が起きた。これははっきりしていますけれども、あれは自分の政府に対するデモだった。たまたま田中角栄首相が来るので、国内のそういう運動をまとめるのに使ったわけで、標的は実は本能寺だったという面があります。僕は全面的にそうだというつもりはありませんよ。そういう面もあるということは我々情報で知っていましたから、どちらかということ田中さん気の毒だな、と思った。あの人はむしろ援助したいという方ですからね。

五百旗頭 国内闘争に利用されてしまった。ああいうことを機に、日本の援助のあり方とか、通商をやる人たち、あるいは直接投資をする人たちのあり方を改めなければいけないとか、そういうことはなかったですか。

菊地 あの機会にということはないと思いますよ。

日本の経済協力は1959年にインド円借款、パキスタン借款から始まった。ちょうどそのとき、私はワシントンの大使館で担当だったんです。インド援助国会議をワシントンでやったので、僕はそこに出たんですが、日本の対外経済協力はコロンボ・プランの技術協力から始まったんですけれども、円借款は形を変えた輸出信用だったんですね。大型の機械プラントは、普通のコマーシャル・ベースでは開発途上国には売れないようになった。そこで、通産省あたりが円借款をプラント輸出の振興に使おうと考えた。ほかの国は全部そ

うです。大きな工作機械は延べ払いでなくては売れなくなった。延べ払いに毛の生えたのが円借です。条件がいいですからね。

日本の経済協力、殊に有償協力は、初めの段階では少なくとも賠償の延長みたいに考えて、賠償が日本の輸出振興に究極的には役立ったように、円借款、経済協力も、日本の輸出振興、日本の商品になじみを持たせるという傾向があった。それが59年から始まって、70年の半ばぐらいまでずっとあったと思うんですが、それに対して、OECDの中のDACとかああいうところでは、日本はひもつき援助の比率が大きいとか、時々批判があったわけです。

じゃ、外国がそのときひもつきじゃなかったかということ、みんなひもつきです。アメリカなんかは一番ひどいひもつきですが、ひもつきかひもつきでないかというのは借款についてだけいわれる。無償援助はひもつきでよい。日本の場合は、無償の部分が少なく、借款の部分が多いから、ひもつきといわれるんですけども、外国もひもつきです。たまたま無償援助というひもつきを許される分が多いから、目立たないだけの話です。

田中 おおむね無償の方が、援助として見ると質がいいのじゃないかという観念が強いですからね。

菊地 それもあります。ただ、無償というどうしても金額が限られる。何百億円というオーダーの無償はあり得ない。無償というのはほとんど100万ドル以下ですから、無償を幾ら出したからといって、金額には影響はないわけです。それから、実際は相手の開発途上国も、有償でいいからたくさん下さいというのが多い。無償で医療器械をもらうよりも、大きなインフラをつくりたいですからね。

そういうことで、確かに日本の援助は輸出振興的な色彩が強かった。だからこそ、通産省が「経済協力白書」を出した。僕らの代になって、これはおかしい、外国の非難にまるで証拠を提供しているようなものじゃないかということで、「経済協力白書」は外務省から出すべしということになった。輸出振興的な色彩から、人道的な援助にだんだん変わってきたわけですね。

我々が到達した経済協力の理念は、1つは人道的援助、1つは相互依存、この2つです。私が経済協力をやっていたころは、戦略的援助はタブー視されていたんですが、それがだんだんタブー視されなくなってきた。アメリカは初めから戦略的援助です。アメリカの援助は、イスラエル、エジプト、ヨルダン、トルコなどに対する全く戦略的な援助です。日本の援助も、これだけ分量が多くなれば、単に人道援助だけではなく、日本の外交の手段

として使うことも許されるのじゃないかということになったわけです。それが80年代の後半。

私がやっていたときも、外務省は心の中では、経済協力は最高の外交の手段であるべきだと思っていたんですけれども、各省の権限争議の中にながって、こういうことはなかなかいい出せない。もし経済協力が外交の主たるインスツルメントであるという合意ができますと、外務省以外のほかの省は経済協力に口を出せなくなってしまう。つまり、各省の「権限」として口を出せなくなってしまうわけです。彼らだってわかっているけれども、そういうことをいわれると、自分の省が介入する権限がなくなる。それは、大蔵省も困るし、ましてや通産省も困る。経企庁も困る。ですから、外交の手段だ、ということだけはいわないでくれという雰囲気だったんです。

そのころは、経済協力、殊に円借款は4省協議体制というのがあったんです。聞かれたことがあると思うけれども、外務、大蔵、通産、経企の事務官クラス、課長クラスが集まって、円借の金額とか条件を決めていたわけです。これはもちろん、外務省の経済協力局の経済協力一課（現在の有償資金協力課）が原案を出すんですけれども、一応4省協力体制で、彼らにも発言権を認めているわけです。

80年代の末だと思うけれども、戦略的援助に対して、マスコミからも野党からも物すごいリアクションがなくなってきた。1992年になるとODAの大綱ができる。あれは今までの検討の集大成で、人道援助、相互依存、戦略援助、民主主義、イデオロギー的な援助、全部入ったんですね。

そういう変遷を経ているわけですが、それが74年の田中角栄の東南アジア歴訪に対するデモが契機かといったら、そうじゃないでしょうね。

五百旗頭 時期としては、大体70年代の後半ですか。福田ドクトリンなんかはある契機をなしているんですか。

菊地 そうですね。あれは77年ですからね。福田ドクトリンのときは、福田さんに同行したチーフスタッフは僕でした。あれで、5カ国に対して2億ドルずつ置いてきたわけでしょう。

村田 先生は福田ドクトリンのドラフトにかかわっていらっしゃいますか。

菊地 ええ。あれは、私と、アジア局の亡くなった西山健彦君との合作です。

村田 小和田秘書官はかかわっていらっしゃいますか。

菊地 首相秘書官はサブスタンスには関係しないんです。取り次ぐだけです。

五百旗頭 そうすると、経済協力関係は大使がお書きになって、西山さんがアジア外交的な……。

菊地 そうですね。ただ、あれの中心は経済協力ですからね。インドシナの諸国も入れようというのは西山君です。

五百旗頭 ASEAN、インドシナ双方に対しての協力ですね。

村田 下から上に上げたときに、表現とか、文言とか、福田さんは随分手を加えられたんでしょうか。

菊地 加えませんね。福田さんという人は手を加えない。手を加えるのは大平さんですよ。しかも、あの人は文学的な表現に変える。(笑)

村田 「ハート・ツー・ハート」は、福田さんのアイデアじゃないんですか。

菊地 でしょうね。あれはスペイン語では「コラソン・ア・コラソン」だけれども、インドネシア語があるんですよ。インドネシア語で何といったかな。アジア局の連中は、「ハート・ツー・ハート」ということをよくいってましたよ。

田中 そうすると、アジア局あたりで表現が出ていて、福田さんが「これはいい」といったという話ですね。

菊地 と思いますよ。福田さんはアジアに対しては非常な関心を持っていました。東南アジアはみんな植民地でしたが、福田さんは戦前、戦時中に日本に留学した東南アジアの学生を非常に世話して、戦後も「同窓会」と称して招んでやっていましたよ。僕も何回か会に出ました。これはほかのところでいったけれども、福田さんが東南アジアに非常に入れ揚げたので、大平さんは、中国を除いて東南アジアはほとんど関係しなかった。

田中 それで環太平洋。

菊地 環太平洋に東南アジアはもちろん入っているんでしょうけれどもね。(笑)

田中 オーストラリアへ行くんですね。

菊地 豪州へ行っちゃったんだ。

田中 インドシナ援助、ベトナム援助は、日本はサイゴン陥落ぐらいからかなり本格的に考えていたわけですか。

菊地 もちろん、陥落前からずっと援助は考えていたわけですよ。僕が大平さんと一緒にサイゴンに行ったのは64年。ゴ・ジンジェムが殺されたのは63年11月ですが、この後に行ったんです。僕はまだ経済協力局長になっていなかったけれども、世銀のベトナム援助国会議にはよく行きました。世銀も落ちる前から非常に力を入れていましたね。

田中 ベトナム援助がとまったのは、78年のベトナムのカンボジア進攻ですか。

菊地 そうです。

田中 対中援助は……。

菊地 対中援助が始まったのは77年。そのときは、大平さんは大蔵大臣です。僕は、もちろん大蔵の事務当局に話しますけれども、そのころ毎週週末は大平さんと一緒にゴルフに行っていましたから、軽井沢とか箱根への行き帰りの汽車の中で、「今こういう案件が進行中ですから、ひとつよろしく頼みます」と大平大蔵大臣に直接頼んだんです。

五百旗頭 大平外相の秘書官をされると、そんなに後々までおつき合いがあるものですか。

菊地 大平さんという人はそういう人ですよ。2度目に外務大臣になったときは、今英国大使をやっている藤井（宏昭）君が僕の後になったんです。そのとき藤井君はかつては僕のところの課長補佐でしたから、彼からしょっちゅう情報を聞いていますし、大平さんは、大平さんの秘書官でなくなっても、会のゴルフには必ず僕を入れてくれたんです。大平さんが総理になったとき、僕はシンガポールにいたんですが、あれを呼び返せということになって、僕は1年何カ月かで外務審議官で帰ってきたわけです。

五百旗頭 相性がよかったんじゃないですか。

菊地 どうかわかりませんが、非常に温かい人ですよ。

五百旗頭 でも、審議官になられたら、大平さんは亡くなられて……。

菊地 亡くなられたのは6月12日でしょう。6カ月間総理個人代表をやった。その間も、僕はシェルパですから、2回くらいシェルパ会議に出席、そのたびごとに大平さんに報告に行った。僕が報告すると、一々手帳を出してメモっていましたね。

村田 サミットにご出席になったのは、東京サミットと……。

菊地 僕がシェルパとして参加したのは、80年のベネチア・サミット1と81年のオタワ・サミット1。75年からサミットが始まったとき、三木総理、宮澤外務大臣でしたけれども、そのときは僕は経済協力局長。これは幻の「目玉」だったけれども、三木さんの目玉が経済協力だったんです。彼は経済協力を持ってランブイエ・サミットに臨もうとした。ですから、僕はしょっちゅうそれに関係していましたし、その次のプエルトリコ・サミットも、経済協力局の審議官として行きました。それから、ロンドン・サミットも行きました。ボン・サミット、東京サミットは休んで、ベネチア、オタワ。ベルサイユ・サミットの第1

回のシェルパ会議まで出ている。それからしばらくして、89年にアルシュ・サミットがあって、ジャック・アタリ氏（フランスのシェルパ）がシェルパOBに集合をかけた。それでまた私もランブイエに行って、その次の東京サミットには、オタワから一時帰朝した。だから、「サミット」と名のつくものに出た回数では、僕が一番多いんじゃないかな。

村田 ボンと東京のときはシンガポール大使でいらしたから、いらっしゃらなかったんですね。

菊地 そうです。

五百旗頭 最初のランブイエのときに、三木さんの目玉だった経済協力が「幻」というのはどういう意味ですか。

菊地 実現しなかった。

五百旗頭 どういう事情ですか。

菊地 構想は外務省あたりが出したのかもしれませんが。今度橋本龍太郎首相が「世界福祉イニシアチブ」と自分でいい出して、ちゃんとあそこまで持っていったという話を聞いて今思い出したんですが、三木さんは、とにかくサミットの第1回目だ、何か日本でアイデアを出すべきじゃないかといって、そのとき経済担当の外務審議官だった吉野文六さんを直接呼んで、「自分は日本の経済協力の構想を打ち出したい。構想をつくれ」と指示されたんですね。さっきお話ししましたが、その後から出てきた援助の中期計画みたいなものですよ。

吉野さんから僕のところへ下がってきて、5カ年計画で何百億ドルという割とモデストなものでしたけれども、とにかくつくって持っていったんです。第1回のランブイエ・サミットは、今のように夏じゃなくて、たしか11月だった。非常におくれてからディスカール仏大統領が招集したんですね。寒かったので、吉野さんと僕が首相官邸の裏にある私邸に行って、こたつに入って三木総理にブリーフしたんですよ。三木睦子夫人が我々にお茶なんか出してくれていますね。

これは大蔵省には完全に秘密にしていたんです。大蔵省にいったらつぶれるということは、三木さんわかっていたわけですね。あの人は役人経験者じゃありませんから、大蔵省にボイスが全然ない。いよいよ出発の前の日になって、どうしても打ち合わせをしなければいかぬというので、宮澤外務大臣、大平大蔵大臣、我々が官邸に集まって、三木さんが、「実は……」といって、この案を大平さんと宮澤さんに披露したわけです。僕も、大平さんにいわないのはぐあい悪いなどは思っていたけれども、役人の仁義上いわなかった。

6
実際の説明は吉野外務審議官がやったんですが、大平さんはぶすっとして聞いていて、最後に口を開いて、「吉野君、それは外務省の案かね」と聞いたんですよ。本当は三木さんに聞くべきなのを外務省に聞いたから、あれは吉野さんも困ったと思うんだな。吉野さんが「そうです」といったんじゃないかと思うな。もうそれでおしまい。あえて「三木総理の案です」とはいえないわけだ。もし「三木総理の案です」といわれたら、大平さんは「しょうがないな」といったかもしれないと思うんです。

五百旗頭 どうして三木さんは自分でやらなかったんですか。

菊地 三木さんというのはそういう人なんです。そういう性格なんです。僕は歴代の総理をずっと見ていますけれども、日本国の総理で大蔵省に発言権のない総理は絶対成功しない。大蔵省を押さえられる人だけが成功する。少なくとも次官などと直接話ができる人ですね。三木さんは、こういうことができない人の中でも一番できない人。(笑)これは幻のランブイエ案でしたけれども、三木さんも亡くなったから、いっていいでしょう。

田中 その場には三木総理もいらっしゃったわけでしょう？

菊地 もちろん。

田中 本来であれば、「君、それは僕が指示してつくらせたんだよ」といえばよかったわけですね。

菊地 そういうことをしないのが三木さんなんだ。

田中 どうしてかな、不思議ですね。

菊地 しかし、三木さんを少しでも知っている人は、「ああ、そうでしょうな」と思いますよ。つまり、三木さんという人は虚像と実像が余りにも違うんですよ。あの人は清潔だといわれている。清潔でしょう。これは間違いないけれども、彼は物すごい財閥ですからね。森財閥の娘をもらっている。彼は党人だとか何とかいっているけれども、党人で過ごせたのは財閥のゆえなんです。

五百旗頭 でも、そこで一言「私だ」といえば、いい格好できるわけでしょう。そんなにコストが高いとも思えない。自分が少し体を張るところを見せれば、いけるかもしれないと思われるんですが。

菊地 それほど熱心じゃなかったということでしょうね。ダメモト的などころがあるんですよ。そこが僕が100%尊敬できないところなんだな。

五百旗頭 そういうとき逃げるのは、泥をかぶりたくないんですかね。

菊地 いや、泥でもないんだけれどもねエ。

五百旗頭 ちょっとした厄介ですよ。

菊地 あのときは本当に失望しましたね。

田中 ランブイエのサミットでそういうことをやれるということについて、一面では、タクティクスとしてはおもしろいかもしれないけれども、最初ですから、サミット自体についてまだ余りよくわからなかった。

菊地 そうそう。ランブイエ・サミットの始まった経緯は、皆さん方はご存じだと思うけれども、あれはディスカール対キッシンジャーのセーフティーネット、エネルギー問題に関する論争から出てきたわけですね。彼の案で成功しなかった最大のものですから、あれでキッシンジャーはフランスに対して物すごく根に持ったわけでしょう。キッシンジャーは、エネルギー問題はおれが解決してやると思ったら、フランスがついてこない。

村田 サミットについてもう1つだけ伺いたいのですが、10日ほど前に宮崎勇先生にお話を伺ったんです。宮崎さんは、ランブイエから6回ぐらいいらっしゃっているわけですが、おっしゃるように、最初は、首脳を中心としたこじんまりとした少数の会議だったのが、どんどん大きくなっていきますね。経済サミットだったのが、政治問題も話し合われるようになる。宮崎先生は、6回出られた印象として、だんだん随行団の規模も大きくなって、なかんずく大蔵省主導になっていった、当初はバランスがとれていたのに、大蔵省のボイスがだんだんどミネートになっていったのはよくなかったとおっしゃったのですが、先生ごらんになって、そういう印象はお持ちになりますか。

菊地 宮崎君、おもしろいこといったね。それは実感としては非常によくわかります。確かにサミットは変わってきたんですよ。殊に東京サミットなんかは、石油輸入量のシーリングを設けるとか何とかありましたが、サミットはあくまでも経済サミット。必ず「エコノミック・サミット」とつけたんです。

「シェルパ」という名前がついたのは僕のと時からだけれども、シェルパに相当する人たちの間では、経済サミットでは政治問題は議論しない、どうしても議論しなければいけなかったら、開会前夜に首脳だけ集まるから、そこで雑談風に政治問題を論ずることはかまわないということで、いわば政治問題はオフリミットだったんです。私はあるところで今回のリヨン・サミットの話をしたのですが、そのときに、サミットというのは冷戦時代の産物であって、政治問題を非常に多く論ずるところであるという見方は全然違います、冷戦の産物でも何でもありません、むしろ通貨問題の産物だと訂正しておいたんです。

いずれにしても、サミットでは最初は経済、なかんずく金融の問題を議論した。ところが、

だんだん政治問題を議論するようになった。しからは、いつから政治問題が論議されるようになったのかというと、東京サミットからだという人もいるし、1983年のウィリアムズバーグ・サミットからだという人もいるけれども、僕は僕が担当したベネチア・サミットからだと思うんです。

その前の東京サミットでは、たまたま園田外務大臣がテロリズムか何かの問題を議論しようとして、これもまた幻の提案になった。議論されたのかもしれないけれども、声明みたいなものは出てこなかった。ところが、ベネチア・サミットになると、中東問題が大きな山場であったし、その前年の12月にソ連のアフガニスタン侵攻があったでしょう。ですから、湾岸問題は絶対議論しなきゃいかぬ。それから中東問題、レゾリューション（決議）242、337も必ず議論しなくちゃいけないということで、どうしても政治問題を避けて通れなくなった。ただし、やり方としては、前の晩の晩餐会でその話をする。しかし、同時に、テロリズムと中東問題に関してはデklaration（宣言）も出したんです。それで、サミットではもはや政治問題はオフリミットではなくなった。

中曽根首相が出て行って、あそこで初めて日本は西側同盟の一員ということをして、日本の首脳自身が政治問題を大きく出したという意味で、1983年のウィリアムズバーグ・サミットが政治問題化の最初だという人もいます。特に日本ではそういうわけです。ただ、ほかの国はそういう意見はないようですね。

それで質問にお答えしたと思うけれども、サミットはそれからまた変わってきている。去年、おととしからロシアが入ってきた。ロシアを入れて、セブン・プラス・ワンないしはG8という問題が起きていますけれども、これがまた新しいサミットの流れですね。ところが、今の常識は、セブン・プラス・ワンでしばらく行くのではないか。

というのは、去年はエリツィンが出てきて、経済問題のときには参加しないけれども、政治問題を議論したときには入った。移行期の経済とか何とかやるときには入った。そういう意味でセブン・プラス・ワンということになったのですが、今度のリヨン・サミットでは、それにまたプラスして、地球規模の問題に関してもチェルノムイルジン首相を入れた。そうすると、これはセブン・プラス・ワンよりもG8にちょっと近づいたかなと思うんです。G7.75?（笑）

田中 外務審議官になられてからの最大の問題は、日米自動車問題だったということによ

ろしいですか。

菊地 最大とはいわないけれども、非常に大きな問題だった。

田中 さっきのお話ですと、シンガポールから帰ってこられて、大平さんから直接ピックアップされたということですね。

菊地 そうじゃなくて、大平さんから外務次官（高島益雄）を通じて帰せということになった。

田中 大平さんは、自分のもとで菊地さんに経済担当の外務審議官をやってもらいたいと思ったということですか。

菊地 ということより、恐らくシェルパに僕を使いたいということだったと思います。外務審議官即シェルパですからね。

田中 その一面で、お戻りになる80年ぐらいには、自動車の問題がアメリカでは相当大きくなっていましたね。

菊地 前の年の79年からね。

田中 このときの情勢認識は、通産省と比べて最初から違っていたとってよろしいわけですか。

菊地 通産省とというよりも、僕と天谷君との考え方の違いといった方が正確でしょうね。というのは、外務省とか通産省といっても、いろんな意見の人がいますから、なかなか一筋縄ではいかない。

田中 天谷さんは最初から、アメリカのいうように、自主規制でいくんだったら……。

菊地 あなたから質問が出るというので、ちょっと僕調べてみたら、対米自動車輸出の「自粛」という言葉を使っらしいね。あそこさすがに「自主規制」という言葉は使っていない。

田中 自動車問題は79年に大きくなって、80年にある程度一段落着いて、また80年後半から81年にかけて大きな問題になって、81年の春に168万台になるわけですね。草野厚という人が『日米摩擦の構造』の中で、80年の夏ぐらいまでに通産省の米太課長がアメリカにフィーラーを送って、自主規制でどうかというようなことをかなりいったということが書いてあるんですけども、そういうことはご記憶ありますか。

菊地 いや、知りませんね。

五百旗頭 天谷さんは自粛を主張したのに対して、大使はどういうお考えだったのですか。

菊地 私は、いずれ自主規制みたいなことはやらなくちゃいけないと思うけれども、まだ

早い、時期尚早論を唱えたんですね。ちょっとダラ幹といえばダラ幹かもしれないけれども、それには理由があります。

80年6月22日にベネチア・サミットに行ったときに、大来さんが「首脳代行」、僕が「外務大臣代行」ということで会場に入っていったら、そこにカーター大統領とブリジンスキー補佐官がいて、我々の方へ寄ってきて、突然カーター大統領が「自分のところの情報によると、トヨタ、日産が設備の増強をしているというニュースが入っている。これはどういうことなのか。アメリカ国内ではこれは対米輸出増につながるんじゃないかと心配している向きがあるが、これを調べてもらえないだろうか」といったんです。カーターさんは絶対単刀直入に物をいわない。つまり、要求がましいことはいわない人で、僕はあの人は非常に尊敬しています。優柔不断だという人がいるけれども、他方、ほかの国に対する礼儀を非常によく知っている人です。最近のミッキー・カンターみたいな人とはおよそ違う人種のアメリカ人。

さっき田中先生がおっしゃったように、その前の年から日本の生産台数が1000万台を超えて、日本の自動車業界が非常に隆々としているときで、対米輸出もふえている。アメリカの中では既に問題になっている。それに不況も出てきた。ちょうどアイアコッカが出てきたころですね。そういうアメリカ全体の雰囲気踏まえて、こういうニュースがあるけれども、またぞろ対米輸出がふえるんじゃないかということで、カーターさんが頼まれたんでしょうね。

我々は薄々は知っているけれども、大統領の質問に対して回答するほどの数字は持っていない。会議はベニスから離れたサンジョルジオという島でやったんですが、亡くなったけれども、後から京セラへ行った森山信吾君が通商局長か産業政策局長かなんかについてきていたので、僕は彼に連絡して「どうなっているんだ」と聞いたら、彼が飛んできてくれた。彼が東京に電話した結果、逃げ口上かどうか知りませんが、「あれは生産性の向上、設備の改善であって、設備の増強ではありません、これは輸出増につながることはありません」というふうに回答してくれというので、翌日そういうふうにカーターさんに回答した。その雰囲気から見ると、今すぐ自主規制をやれ、ましてや要求がましいものではないということを感じ取っていたわけです。

それで日本へ帰ってきたら、フレーザーUAW会長が来て、自動車労組の意見として自主規制をやってくれというようなことをいい、それにマイク・マンズフィールド大使が乗った。その後のマンズフィールド大使の行動から彼のそのときの行動を判断するのは

難しいけれども、彼は珍しく日本の業界を説いて回って、自主規制してくれというようなことをやったんです。それで日本の国内でも非常に問題になって、だんだん緊迫感が盛り上がった。その当時、天谷君がいった言葉としてもはや歴史に残っているけれども、「相手が病院に入っているのに、病院に土足で入るやつがいるか」という表現をして、日本の自動車業界を非常に怒らせた。日本の自動車業界では、天谷はけしからぬという話になったわけだね。

その当時、その話は僕は知りませんでした。けれども、自分のベニチアでの経験からいって、「労働組合や出先の大使がいった段階ではまだ早いじゃないか」、「もし本当にアメリカが日本に自主規制をしてもらいたいのなら、親しい仲だから、カーター大統領自身から日本の大平総理にいつてくるべきである」、というのが僕の考え方で、アメリカのITC（インターナショナル・トレード・コミッション）も、アメリカの自動車業界は輸入によって被害をこうむってないという判決を下して、僕の議論に味方してくれたわけです。

田中 天谷さんの本によれば、80年11月ですね。

菊地 実際に自主規制を始めたのは81年ですからね。そういうのが出たわけですが、日本の政治家を含めて、これはやらなければいかぬという流れがとうとうと出てきた。80年は大来外務大臣、81年になると伊東外務大臣になるわけですが、伊東さんは大平さんから非常に薫陶を受けて、対米協調が基軸だ、ということに嫌というぐらい教えられていますから、経済の問題ならアメリカに好意的にはからってやれということが頭にしみついているわけです。

僕は今でも覚えていますけれども、あるとき伊東さんに呼ばれて、「菊地君、これどうする。マンスフィールド大使からやんやいってきて困るんだよ」といわれたので、「大使はそういうのが仕事ですから、そういうのに外務大臣が一々悩まされる必要はありません」といいました。「じゃ、自動車どうする？」というから、この前のベニスの話をして、「いや、まだ早いですよ」といったんです。そうしたら、「これからまたアメリカ大使館へ行かなくちゃいけないけれども、どういけばいいんだ」というから、「もう少しいろんな情勢を見きわめてからの方がいい」といいなさいといったんですが、伊東さんは「これは当然自主規制をやるべきです」という答えを当然私に期待していたわけだから、そのときは彼は非常に不満相でしたよ。

現実を見るべきだし、これは若干外交的な策略でもあるけれども、向こうから正式に頼

まれなうちに自主規制をやるぐらいはあげたことはないですよ。少なくとも大統領の口から「自主規制をやってくれないか」といってきて、「大統領がそうおっしゃるならやりましょう」という形で、言葉は悪いけれども、恩を着せた上でこういうことはやらなくちゃいけない。輸出自主規制は自由貿易違反、完全にガット違反ですから、ヨーロッパの国は日本を非常に非難するわけですね。

あ那时候、二階堂さんは総務会長だったかな。ちょっと肩書は確かじゃないけれども、彼のところへ天谷君と僕が呼ばれて対決させられた。僕はむしろやらない方の時期尚早論、天谷君はやるべしということで、随分議論した。二階堂さんはアメリカで生活したことがある人ですから、非常に親米的な人ですけども、最後に、「いろいろ両方の言い分を聞いた。確かに菊地君のいっているのは正論である。しかし、僕は政治家として天谷君の考え方をとる」といったんです。それでおしまいだ。レベルを1つ下げると、僕が外務審議官のときには、深田宏君が経済局長だったけれども、彼は僕みたいな考え方をしない。むしろ彼は天谷君みたいな考え方でしたから、一たん政治家の方でそう決めれば、僕もそれ以上は抵抗しなかった。

田中 天谷さんの本を読むと、天谷さんは、今ここで譲歩しないと、ダンフォース・ビルのようなものが成立してしまっ、より悪い保護主義立法が出てくるから、これは必要悪でしようがないんだということをおっしゃっていますけれども、政治家の人が天谷さんのいっていることが政治的にはやむを得ないといったのは、その議論を納得したという話ですか。

菊地 いや、違います。日本がおりにることによって解決するなら、というのがいつもの政治家の発想ですよ。もしこれが通らなかつたら、もっと悪い法律が出るとか何とか、いつもそういわれるんだ。私は経済外交を随分やりましたけれども、これがないともっと悪いのが出る、アメリカの行政府のいうことをのまないと、もっと悪い法律がアメリカ議会から出る、そういわれて本当だと思っ、こんなばかな外交はないですよ。これは相手の策略というか、詭弁に従うだけの話ですからね。

田中 時期的にいうと、168万台決着は総理訪米の前だと思うんですが、訪米の前に何とか片づけなければいけないという要素は結構あるんでしょうか。

菊地 あるでしょうね。

田中 アフガン侵攻とイランの問題で、日米間で安保関係でちょっとぎくしゃくしている雰囲気がありましたね。天谷さんの本にもそういうことがところどころに出てきますけれども、アメリカに対してある程度こっちでおりてやらなければいけないというのは、安保面で負い目があるというのもあったんですか。モスクワ・オリンピック何とかとかか……。

菊地 「インセンシティブ」問題でしょう。

田中 インセンシティブだといわれたわけですね。

菊地 これは普通の人がいわないことだけれども、大来外相は、自分がサイラス・バンス（国務長官）に会って、「今みんながイランから石油を買うことを控えているときに、日本が高値で買った。日本はインセンシティブじゃないか」とバンスにいわれた。大来さんは、日本国内で、殊にジャーナリスト各社に、そういわれたと盛んにいったわけです。

これは本当に大変シェイムなことですよ。いわれたこと自体シェイムであると同時に、そういうことをいわれたと日本国の外務大臣が日本国内で話すのがまたシェイムだ。一国の外務大臣が相手の外務大臣にインセンシティブだといわれて、おめおめ日本に帰ってきて、日本国内でそれをいうというセンスは、我々職業外交官からいえばとんでもない話ですよ。

ある一国の外務大臣がほかの国の外務大臣に「おまえはインセンシティブだ」といわれた。本人は、これは日本国民全体がインセンシティブだと思われていて、自分が代表していわれたと思っているでしょうけれども。私は皆さんと世代が違いますから、皆さん方はどういう受け取り方をするかわかりませんが、あの話を聞いて、僕は、どういう感覚でああいうことをいうんだろうと思いました。これは個人の問題じゃない。国家の問題です。そういうことをいわれて、はずかしめを受けたから復讐するんだなんていうなら、19世紀の政治外交になりますけれどもね。（笑）

田中 大来先生は、いろんな会議でいわれたことをそのままおっしゃるのがお得意の方でいらっしゃいますから。（笑）

菊地 大来さんは立派な人だけれども、ピーター・ドラッカーがこういっていましたが、あれがどういっていましたが、これがどういっていましたがということを伝えることが、彼の最大の身上だったわけです。それが余りに高じて、相手から悪口をいわれたものまで伝えてしまった。その負い目みたいなのがあったでしょう。

田中 負い目みたいなのがあって、病人になっているのに、病人をインセンシティブにやってとか、いろいろいわれて、政治家の方々の決断に影響を与えたということですか。

菊地 それはあると思います。これがなければ、もっと悪いダンフォース法案が通るとい
う考え方は、戦後の日米経済関係を毒してきた考え方ですよ。まさにアメリカの策略に45
年間ずっとひっかかってきた。アメリカの行政府は、事、通商問題に関しては、当事者能
力は本来的にないんですから。

田中 米国憲法によって権限を与えられてないですからね。

菊地 その当事者能力のない人と交渉することは、頼りないことおびたしい。

田中 でも、あれはなかなかいいシステムですね。（笑）

菊地 日本の学者先生方、殊に経済関係の議論をする人はそれをもっと勉強されたい。
今度APECでパーシェフスキーが前倒しの案を提案したとかいっているでしょう。パー
シェフスキーはあんなことを提案する権限は何もない。アメリカの国会からファーストラ
ックの権限をもらわない限りそれはできないんです。知っていても書かないのかもしれな
いけれども、日本の新聞の経済記者は本当に勉強していない。

田中 後から考えてみると、自動車自主規制は、日本の企業にとってはいいところづくめ
で、通産省にしても、いうことを聞かなかった自動車業界に紙切れで生産を割り振られる
といういい話になったわけですが、天谷さんの本を読んでも、そんな話はどこにも出てき
ませんね。天谷さんは、日本の国のことを憂えて、しかも、アメリカの立法がどうなって
いるか合理的に考えて、だから自主規制はやむを得ずやったということになりますけれど
も、通産省は、ひょっとしたら自主規制をもっと前からずっとやりたくて、機会をねらっ
ていたということはないですか。

菊地 そこまでは僕はいわないな。81年に自主規制が決まって84年までずっと続くわけ
ですね。最後の年になると、168万台に上積みした上で、これこそ本当の自主規制ですとか
いってまたやった。そのころ、霍見芳浩が国務省かホワイトハウスに、「日本の対米自主
規制は即刻やめさせるべきである、なぜならば、日本は苦しんでいるどころではなくて、
先発の割り当てを持っている自動車会社は、全体の量が制限されているから、単価を引き
上げて非常に儲かって御の字である、それに便乗して、アメリカの業界が自動車の単価を
値上げしており、消費者がダブルパンチを食っている、これは即刻アメリカの方からやめ
てもらおうようにいうべきである」、という手紙を書いたんです。

アメリカ政府はレーガン政権になっていましたが、それもかなり影響したと思うけれど
も、今後アメリカ政府は日本政府に対して自動車の自主規制は要求しないといった。それ
でも通産省は自主規制を続けた。アメリカの立法が怖いからやったわけでも何でもなし。

アメリカが「やらないでいい」といったにもかかわらず続けたんです。

田中 それは80年代の真ん中から後ですね。最初的时候は、通産の人もやむを得ずやったけれども、後で考えてみると、なかなかうまい話であったということがわかったという方が本当ですか。

菊地 そっちの方が近いでしょうね。通産省をそう悪者にする必要はないよ。(笑)

五百旗頭 小長啓一さんに聞いたときに、繊維というあんな小さな問題で日米関係がこれほどまで政治的に悪化した、そのコストを考えると、部分経済の問題で突っ張ることはむしろよくないというふうに、繊維の先訓として通産省内で認識ができた、それが自動車に生きたとっていましたね。

菊地 通産省の人はまじめだから、いろいろ考えるんだと思いますよ。私はどちらかというところロングパースペクティブで見方だから、例えば自動車の168万台も未達でしたね。

五百旗頭 あの時ではなくて、その後のが未達だったんです。

菊地 その後のが未達か。その前の東京サミットの360万バーレル、390万バーレルのシーリングも未達、繊維も未達でしょう。皆未達ですから、これをやらなければ大変なことになるといえるのは、結果論からいうとうそです。それはむしろアメリカが、政治的に国内でいい顔しようというので日本をスゲープゴートにしたことは、はっきりしていますね。

繊維問題のような小さいことが政治問題化して日米関係を悪くするという認識が通産省あたりにあったかもしれませんが、僕はそう思わないな。というのは、これもハインドサイドのベネフィットで、いかなる経済問題も日米関係を悪くしたことはないんですよ。ありますか、教えてください。

五百旗頭 繊維紛争は悪くしたんじゃないでしょうか。

菊地 悪くしませんね。

五百旗頭 ニクソンが随分ささくれだって……。

菊地 悪くしたから、沖縄は返さなかったですか？

五百旗頭 いや、それは先に決まっていたから。69年11月に約束して、それを72年に執行したわけですけども、例えば中国と頭越しのことをやるに当たっては、繊維の密約を果たさないことへの憤りがニクソンの側で働いていたんじゃないでしょうか。

菊地 全くうそ。それは自信を持っていえる。アメリカ人というのはそういう発想をしないんですよ。こっちでやられたから、こっちで報復するとか、アメリカ人のメンタリティーにはそういうのはない。そういう意味で、アメリカ人というのはとってもいい人です。

人はいいんですよ。けんかしてもすぐ忘れちゃう。(笑) 僕はアメリカは長いですけども、アメリカ人は根に持たない。

五百旗頭 そのとき怒りますけれどもね。繊維は、ニクソン大統領は怒っていましたね。

菊地 あの人は怒るでしょう。けれども、その繊維交渉をしたのは我々ですからね。僕は69年にワシントンに到達したけれども、その前の68年に、ニクソンは、スタンズ商務長官を選挙参謀にして大統領選挙に勝ったわけでしょう。今と全く同じで、ミッキー・カンターがクリントンの選挙参謀をやってUSTRに乗り込んできて、商務長官になったでしょう。モーリー・スタンズも、選挙参謀をやって商務長官になった。

五百旗頭 宮澤さんがお相手しなきゃいけなかった。

菊地 あれは全部僕が証人ですよ。ニクソンは怒ったでしょう。人間だから怒るでしょうけれども、それがほかの日米関係を悪くしたとか、それで米中の頭越しになったとか、そういうことはない、僕は神かけて誓うな。それはないですよ。

田中 対中接近にしても、佐藤さんに伝えるのは半日前ぐらいからという……。

菊地 あの元凶はキッシンジャーです。キッシンジャーは日本人を絶対信用しない。日本に伝えたら必ず漏れると考えていた。

田中 国務省も余り信用しなかったわけですね。

菊地 そうでしょうね。キッシンジャーが原因ですよ。ニクソンとは全然関係ない。私はニクソンには副大統領のころから会っている。会っているといたって、僕は下っ端だったけれども、会えば、その人の雰囲気はわかりますね。ニクソンというのはそういう人じゃない。グアム・ドクトリンもニクソン、米中もニクソン。あの人は典型的なアメリカ人です。単純といえば単純かもしれないけれども、そんな悪意のある男じゃないです。

五百旗頭 切りかえが早い人でしょうね。

菊地 とても切りかえが早い。

五百旗頭 若泉(敬)密使を使って、繊維の問題で密約したのができなくなったことは、ニクソンもキッシンジャーもやむを得ないと了承した。ところが、71年に佐藤さんが訪米したときにまた約束して、なおできなかった。その後は本当に怒ったというんですね。

菊地 何を約束したの？

五百旗頭 例の沖縄返還のときに若泉敬を密使にして密約した。これは最近若泉さんが大きい本を書いて、キッシンジャーとの間でやったとっていますが、それができなくなったわけですね。大平通産大臣は賛成しないし、宮澤さんもしないというので、どんどん

延びていったわけです。佐藤さん一存でやっていて、外務省にも通産省にも話していなかったもので、協力が得られない。そのことに理解はないではなかったけれども、サンクレメンテへ来たときに、佐藤さんが首脳会談のときに、繊維の問題を解決するということについて、もう一遍改めて努力することをニクソンに約束した。そのことの方が問題だという話も聞きました。

菊地 それは違う。それはサンクレメンテじゃない。ワシントンです。佐藤さんがたしか国連に来て、帰りにワシントンへ寄ったんです。そのとき通訳したのが赤谷源一さん（故人）です。僕は大使館の経済参事官で経済班長でしたから、よく知っていますけれども、それはうそだと思う。サンクレメンテは文書はもちろんないでしょう。そのとき僕は赤谷さんに「また約束したというけれども、あなたどういうふうに通訳したんだ」と聞いたら、ニクソンがその問題を出したときに、佐藤さんは何という日本語を使ったのか知らないけれども、赤谷さんの通訳は「アイル・ドゥ・マイ・ベスト」といった。

五百旗頭 それはワシントンのときですね。

菊地 ワシントンのときです。だから、佐藤さんはそれほど悪者じゃないと思うけれどもね。あの人は自分の責任においてやったんですよ。それには前例があるわけだ。吉田茂は2つ独断でやっているでしょう。日米安保条約は彼しか署名していない。講和の前に、日本に駐留してもらってもかまわないとアメリカ側にあらかじめ申し入れたのも、全く吉田茂の独断です。

五百旗頭 国連からの帰りにワシントンでニクソン、佐藤がもう一度会ったときに、ニクソンの方からその問題を持ち出して、佐藤首相は改めて「アイル・ドゥ・マイ・ベスト」と訳されることをいった。

菊地 そう。僕はサンクレメンテの話は聞かないな。僕がワシントンに転勤して最初に手がけたのが、化合繊の輸出規制です。「繊維」といっているけれども、綿製品じゃない。化合繊です。

田中 綿製品は随分前に自主規制になっているわけですね。

菊地 そう。綿製品は1965年ぐらいから。それからMFAがあるでしょう。

村田 ニクソン訪中の発表があった後に、佐藤・ニクソン会談をサンクレメンテでやっていると思うんです。

五百旗頭 もう一度チェックしてみます。失礼しました。

菊地 それは思い過ごしだと思いますよ。僕はワシントンにいて、それほどまで深刻に感

じなかった。

田中 繊維は田中角栄通産大臣が決着させるわけですけども、その前に対敵通商法をやるぞとおどされたわけですね。

菊地 それもうそ。僕はワシントンの経済班長で、知らないはずがない。何に書いてある？書いてあったら、僕はその人と対決するわ。(笑)

田中 I・M・デスラー、佐藤英夫、福井治弘の3人で書いた『日米繊維紛争』という本ですね。最後の段階では、トレーディング・ウィズ・ジ・エネミー・アクトを適用するといったんですか。

菊地 僕はその担当だったけれども、トレーディング・ウィズ・ジ・エネミー・アクトは日本に適用する根拠がありませんよ。戦時中の敵で、しかも、講和条約を結んでいない、国交も回復していない国がトレーディング・ウィズ・ジ・エネミー・アクトなんです。

田中 あれは千九百十何年ごろの法律ですね。私が読んだ本と大使がおっしゃっていることを整合させるとすると、そういうことを口走ったアメリカ人がいるかもしれないけれども、そんなことはできたはずはない。

菊地 あり得ない。だって、トレーディング・ウィズ・ジ・エネミー・アクトというのは根拠がないですよ。僕は、秘書官になる前の58年から62年までと、69年から71年までと、ワシントンで2回経済担当をやったわけだ。

田中 それは72年です。

菊地 僕が帰ってきてからあの協定ができた。通産大臣が大平から宮澤にかわり、宮澤から田中角栄になった。田中角栄はそれで総理になるわけでしょう。3人かわって、大平、宮澤は解決できないというよりも、解決しようとしなかった。というのは、宮澤さんは規制に反対なんだ。輸入量が総消費の1%にもならないのに被害があるはずはないといって頑張った。そうしたら、スタンズが紙切れをちらちらさせた。それに対して宮澤は、「私はそんなもの知りません」とはっきり断ったわけだ。

僕がいかにこの問題にインボルブしたかということの証拠になると思うけれども、1970年に、愛知外務大臣、宮澤通産大臣2人が雁首並べてワシントンへやって来た。これは余り報道されませんでしたけれども、そこへキッシンジャーとアレックス・ジョンソン国務次官2人がワシントン大使館の公邸に来たんです。下田(武三)大使はそのときいなかったか何かで、僕が出るといわれて、その会談に出ました。そのときも、キッシンジャーは例によって高圧的だったけれども、あのときはさすがに「約束」の話はしなかった。

これは大統領のポリティカルな生命がかかっているみたいなことを盛んにいっていましたが、愛知、宮澤2人とももちろん承知しない。宮澤さんのことだから、「インジュリー（米業界の被害）はどうなんですか」とか、非常にテクニカルな質問をする。キッシンジャーはそんなこと知ったことじゃないわけですよ。全然かみ合わない。それで2人は帰って行った。これはあなたの話とちょっと合うけれども、後でアメリカ側は「日本から2人も閣僚が来て、繊維問題は解決できなかった」といって冷評したんです。アメリカの言い分に納得しないんだから、当たり前でしょう。

ニクソンが最も怒ったのは、繊維問題そのものじゃないんですよ。京都三高出身でかつて共産党だった人ですが、日本の宮崎輝という化合織会社の会長が「絶対反対」といって、対敵復讐戦を開始して、逆にウィルバー・ミルズ（下院歳入委員長）と合意した。あのときの官房長官は根本龍太郎だと思うけれども、交渉は妥結したので、今後政府間交渉を続ける理由はなくなったものと認める、という官房長官声明を出した。これにニクソンは怒ったんです。繊維問題そのものに怒ったわけじゃない。つまり、ニクソン政権が完全にバイパスされて、しかも、ニクソンの政敵の民主党のウエーズ・アンド・ミーンズ・コミティーのチェアマンのウィルバー・ミルズと合意した。間に立ったのはマイケル・ダニエルズという弁護士だ。この4月にワシントンに行ったら、この人に会いましたよ。

僕はきょう話すのは初めてですけども、日米繊維交渉、化合織交渉の真相を知っている人はもう余りいない。しかも、吉野さんと僕が担当で、後からテキサス・インスツルメントの会長になった通産省の吉崎（英男）参事官と3人でやっていたんです。下田大使の後に牛場大使が来たんですが、ピーター・フラニガンというディロン・リードのインベストメントバンカーの人をニクソンが連れてきて、牛場・フラニガン会談をずっとやっていた。

ウィルバー・ミルズとの合意で、完全に政府間交渉が閉ざされた。その後、ニクソン政権からは交渉の再開を何回もいつてきたけれども、宮澤さんがいる間は日本は取り上げなかったわけですが、田中角栄になって、何のことはない、途端に角栄的な腕力で関係業界に特融（特別融資）2000億円をやった。現に何が起きたかというのと、業者は繊維機械を破棄するかわりに、全部東南アジアに売り払った。全然損はしなかったんです。

向こうはがんじがらめのシーリングを要求してきた。シフォンとかサテンとか大枠を決めるのみならず、細分枠まできちっとしたものを要求してきた。こんな輸出規制をされたら未達ができる、こんなものは自由貿易でも何でもないので、我々事務方は、枠の

間の融通とか、未達だったらこっちへ移っていいとか、一生懸命交渉して、かなり実績を上げた。実績を上げつつあつたところに、ぱっとウィルバー・ミルズとの合意ができた。再開された政府間のやり直し交渉では、何のことはない、田中角栄通産大臣は、我々がせっかくおろした以前のアメリカ側の原案をほとんどそのまま全部のんだわけです。そのときは既に私は経済協力局に帰ってきていましたけれども、外務省の経済局は涙をのんだわけです。あれだけ交渉して相手方をおろしたのを、もとの原案をのんだ。ちょうど1941年9月12日のハル・ノートと同じですよ。そここのところは、その本には書いてある？

田中 今持っていないからわかりませんが、あの辺も、密使が行ったり来たりして、田中角栄さんとそれ以外の何人かで、どこでおりるとか何とか筋書きを決めたというようなことは書いてありますね。71年9月に入ってから、田中通産大臣はアメリカに対する大批判の演説をやって、その裏で、おりる手はずを整えたということが書いてあります。

菊地 ちょっとドラマチック過ぎるね。(笑)

村田 長時間ありがとうございました。